老若男女 魑魅魍魎にボインちゃん 秘境温泉極楽浄土への旅～ポロリあるよ～

木綿箸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
老若男女　魑魅魍魎にボインちゃん　秘境温泉極楽浄土への旅～ポロリあるよ～

【Ｎコード】
Ｎ４２８８ＢＡ

【作者名】
木綿箸

【あらすじ】
日本民族学者、イカス吸血鬼（無職男性）と、ロリフェイスボインちゃん（魔女っ子学生）による…ありがちな設定大量ぶち込み型―温泉宿サスペンス＆ａｍｐ；ホラー＆ａｍｐ；アドヘンチャー＆ａｍｐ；ラブ＆ａｍｐ；ファンタジア。

いち

霧のかかった道路に、つらなった街灯をみてる。
田舎の山道。
消えかけた街灯。
パチパチ世話しなく瞬きをして…

あかりひとつをとっても時代のうつろいを感じる。
一昔前は、蝋燭の灯、油のランプだった。揺らぎのある、触れれば焼けてしまう熱いともしび。
この瞬きする街灯も、電球に触れれば熱いのだろうか。

コートのポケットから、ＬＥＤのペンライトと、バスの時刻表を取り出して、バスの到着時刻を確認した。
いま、バスにのってる。

自身、歳をとった気はしないが、関節も視力も、成長の段階ではなくて使いふるしていくんだなとおもう、時刻表の字が小さすぎてみえない。

バスの窓は結露してる。杉山の葉にもたくさんの夜露がしっとりおりてる。

葉に浮いた露のひとつひとつを見れたあの頃、際限のない食欲に性欲に、ただ生きた感覚をたのしんでた。

いまは
ただ　ねむりたい。

バスが二三、身震いをし
停まった。

「…お尻ごわごわ」

バス停を降りると、
腰が半分に折れまがった老婆が蝙蝠傘を持ってまっていた。
足元はゴム長で、畑仕事してそのまま迎えにきたような格好だった。
こちらを見て、目を離さない。バスを降りたのも、自分だけだし、
きょうとまる旅館の使いで間違いない。
「若い殿方が珍しい、お一人で？」
「こちらの史料館に、調べものを」
「ああ、郷土史の先生さんね、なんぎやね、こんな気候の悪い日に」
老婆が歩きだしたので、うしろについて歩いた、旅館までは二百メートルくらい。

霧はたちこめているが、雨はふっていない。使いの婆さんは傘をさしたままだ。
雨はふっていない。
傘を叩く水滴の音がたまにする。

コートが重い、たぶんいま鏡を見たら髪がもやもやになってる。
「外人さん？」
婆さんがしゃべった。
「ひいばあさんに、アジアンがひとりいたみたい」
「そうかねそうかね」

容姿はね、
おめめは、みどりで、

肌の色は白めで、
髪は肩くらいの黒、
脚はながくて、鼻もたかくて、若いイギリス紳士みたいなかんじ。
ただ、ローマが政治を始めたくらいから生きてる。
吸血鬼。

に

畳みの和室にはいると、ぬれた山のにおい、床のきしむおと、すこしカビ臭い布団。
シーツだけ、あたらしく清潔で、ノリまでかけられていたから、それだけ目立った。

２０時。
「ばんごはんほんとに、いらんかね？」
「いらんて、たべてきたんだって」
バス停から旅館への道すがら何度もきかれ、なんどもこたえてる
「そんなやから、縦にひょろながなって横にふとらんのよ」
婆さんに会って、３０分たってないのに、この人から産まれた気がしてきた。

「ここから温泉でてるとこ近いんだっけ」
「川添の道くだったらすぐよ」
「荷物もおいたし、いってくるよ」
婆さんは、ばんごはんのことをいいながら無料貸出のお風呂セットがあるからと、部屋をでてった。

部屋におかれたちゃぶ台の上に、手書きでかかれた温泉までの地図がおいてあった。
さっき、いれてもらったお茶をすすりながら。
地図をもって、窓から外を。

旅館は渓谷の上にあって、すぐそこに川の水流。旅行の下に、赤塗りの板でできた橋のような、遊歩道が作られていてそれを行くと着くらしい。

朽ちかけた橋の足元にぽつぽつあかりがともってる。つづきが山林の中につながって消えた。その先も夜でも歩けないではないくらいにはしてあるのだろう。
赤い橋。橋の手摺りには、陰気に、木の枝がしだれかかっていて、川の方へ誘う痩せた女の腕にみえた。
このあたりは、銅山と温泉宿があるので一時は流行ったところだった。いまはもう疲れて、使わなくなった余計なものを山に還していく、途中なんだろう。

集落をみても、廃校になった学校、猪や狸に荒らされた住人のいない家屋、朽ちて通行止めになった山道…ばかりだった。

感傷もほどほどに、
浴衣に着替えてると、
まだパンツと靴下なのに、婆さんはなんにもきにせず、ラップにつつんだおにぎりと、貸出お風呂セットをもって戻ってきた。

さん

橋の下は、黒い流れしかみえない。二三日前に、雨がふって水かさがましたのだろう　穏やかではない。

ラップのおにぎりを、片手おてだまをしながら、かぞえうたを歌おうとし、やめた。

あたたかいおにぎりが、すこし　うとましい。

自分の頬や耳や胸。
冷たい。
吸血鬼の自分には体温がない。たちこめた霧よりも、岩よりも冷えてる。
足元を流れる黒い川とおなしで、ただ、からだの真ん中にあるポンプが冷えた血をまわして朽ちていくのを待つ途中なのだ。

……。

携帯がなりだした。
「はい」
女の子からだった。
「どした」
「どしたじゃないです！！今晩はレポートの発表があるから、研究課題がいなくなったら困るっていいましたよね！！」

たいへんに怒ってる。

電波の先にいるのは、

１４歳の魔女っ子学校バンパイアハンター科に通う　ボインちゃん（巨乳）本名がはなちゃん。

「約束しましたのに！」
「いっしょの棺桶で眠ってくれたら、レポートに協力するって約束でしょ。約束破ったのはボインちゃん」
「いまどこです！？２０分なら遅れてもだいじょうぶなの！」

「いまね、極楽浄土温泉宿の旅～」

し

「旅行なんてきいてません！勝手にどこまりいかれたら契約もあったもんじゃないです！」
穏やかではないかんじ。

魔女はいくつにかなると、故郷から離れ、一人暮らしの修業を（ジブリ、キキしかり）。使い魔を一匹はもつようになる。
黒猫や梟、蜘蛛、蝙蝠。魔力が未熟な内は、本人より下等なレベルの動物なんかと契約を結ぶ。
ビスケットを三枚、毎日あげるから、命令を聞いて一要領はこんなかんじ。
もちろん、魔女っ子学校のボインちゃんも、修業試験で、使い魔と契約を交わしてる。イカス吸血鬼と。
「ボインちゃんの魔力がもう少し強くなきゃ契約の効力はでないんだよ」
ただ、イカス吸血鬼の方がまだまだ魔力が強いから、こちらが任意同行してるというかんじになってる。
今回も、その使い魔をつかってなにかしらさせるような課題レポートなんだろうが、前回はレース網をしろとか、ぬかみそをつくれとかで…だいぶこりた。
「ほうきでくるといいよ、バスだと大変だったから」
「…ーー…ー！」
「ねえ？ゆっくりできるし」
「ーー…ーー

電波が遠いのか切れちゃった。
あちらも大変そうだか、こちらも用事があるし、
また旅館にもどったらで。

ご

今回、この寂れた銅山と温泉旅館にきているのは、ただ羽を伸ばしたかったわけでない。一様、郷土史料を見に訪ねるのが目的だ。史料館とはいえ、ちいさな倉庫のついた寺だが。
三ケ月前にアポをとって明日住職と会う予定になっていた。
ただ連絡がここ二日とれてない。

考えながらたらたら歩いていたら、霧とはちがうあたたかい蒸気が頬に触れた。
橋の先が終わったら、開けた先には岩場が。
天然温泉。

月がぼんやり空にあるし、暗くはあるが、人間と比べると断然夜目がきく。自分には充分な明るさだった。
「これだとボインちゃんは怖がるだろうね」
森が近かった。
瞼を閉じると、ひとつひとつのちいさな、土くれ、植物の葉や根、虫、獣、息きが重なって、得体のしれない大きな生命のかたまりになって揺れている。
その中に取り込まれて、自我を盗られるのではないか、そういうような感覚に襲われる。

怖がってなきべそをかく、ボインちゃんを想像してクスリとした。

こういうときはね、たぶん、委ねてしまうしかない。自分よりも、おおきな流れを前に、あらがうのなら、大きな流れはもっと大きく避けがたい恐怖になる。
だから　いっしょになって揺れているしかない。

そうしてるのが　気持ちいい。
「さてお湯につかりますか」

蝋燭を思い浮かべた。
人の寿命に例えたのはうまい話しだとおもう。

風に揺らいで灯る様は、危うくて人任せ。消えるも灯るも、ふく風次第。
強い風にあらがって炎を強くすれば、一時は生き逃れても、蝋は減って寿命が縮まる。
蝋が生命なのか、炎が生命なのか、炎の消えた先、暗闇が生命なのか。

これもまた、気ままな風の采配なのだろうけど。

ろく

「あったかあー」
手早く旅館の浴衣をぬいで、温泉につかった。

吸血鬼には体温がない。冷めた死体のような身体が、ぬるくなってく。
「いきかえるわー」
血がぬくもるとなんだか母をおもいだす。垂れてたけど乳房はおえきくて、あたたかだった。
父は吸血鬼のバツイチ子持ち（自分）で、再婚した父の嫁、母は人間だった。
父がいうには、前の妻は大柄だったが、新しいのは小柄で、小回りもきくからいい、ということだった。
自分は、このあたたかい母がすきだった。
大柄な母もすきだったが、吸血鬼だったから体温がなかった。
このあたらしい人間の母の体温が、あたらしかった。
母におぶわれて、思う。
もしかしたら、自分も、このまま、あたためつづけたら、生き物になるのかもしれない。
いまの自分は、どちらかといえば野を走る”生き物”より、土くれに近い。

—…ポシャ
誰もいないお湯がはねる音がした。

しち

はねたお湯の波紋が、よりより移動して、消えた。
濁りのあるお湯なので、木の実が落ちてきたのか、なにか隠れたのかまではわからない。
波紋のはじまったあたりまで泳いだ。
なにもない。

このあたりでは、
有名な昔話しがある。

人魚伝説だ。

海はない。四方、木々に囲まれた山奥だ。
だが、この村、海洋生物の化石がでる。

集落に伝わるはなしはこう。

銅山が開けたときより温泉が湧きでたときよりもっと昔、ここは海だった。
この村にある湖は、山が競り上がるときに取り残された海のはしきれ。
そのとき逃げ遅れた海の魚や貝はいまも湖で姿を変えて住んでいる。
海から切り離され、湖になってすこしたつころ…そこに住む魚は夜になると、たいそう大きな声で泣くようになった。
海が恋しく、塩気の少なくなっていく、ここは地獄だ。
大きな声で泣いた。
これがまた、あまりにうるさい。

村では、ひとり、はなし相手でも使わせようということになった。
使いは、はなし好きの女の子。うまれたころから胴のつけねより、手と足のない、達磨の女子にきまった。
これを、魚はたいへんよろこんだ。この女の子供は、手足がなく、魚には、おなじ魚のようにみえたのだ。
魚が泣くと、女の子は魚にはなした。
『滝を昇と竜になるんじゃ。竜はいいぞどこでもいける』
魚は慰められ、うれしくて、前よりも大きな声で泣くようになった。うれしくて、うれしくて泣いた。

つづきは…
その涙が、温泉になったとか。涙は、滝になって、それを昇って竜になったとか。
最後、達磨の女の子はその魚と結ばれて人魚になったというのでしめくくられる。

そして、その人魚のミイラがこの村にあるとかないとか、夜中動くとかうごかないとか。
そんなで、それを見に今回ここにきた。

さっそく、旅館のお土産コーナーで、ミイラの人魚ストラップを買ってしまった。

はち

ボインちゃんのお土産にもうひとつ買っておくべきか。木彫りの人魚ミイラストラップ。女将手作り、悪魔払い済み。

仰向けにお湯に寝て全身浮かべながら、どうこう考えていると、エンジン音が聞こえてきた。地面からではない。空から。

「哲郎さん！！」

ボインちゃんだ。

ボインちゃんは、からだより大きなほうきにまたがって、頭の上まできた。

「よくわかったね、顔しか浮いてないのに」

チェックのプリーツスカートでほうきにまたがってるボインちゃんを、下から覗きこむような状態、だがハーフパンツをはいている。みえない。

「哲郎さん！はやくでないと、ふやけますよ！」

やわらかい、ラビットファーのようなストレートの髪は、ツインテールで、べっこう飴の色してる。とっても長い。

上から覗きこんでるから、そのさきっぽがお湯につかりそう。

「ほうき、あたらしいエンジンつけた？かなり速くない？」

ボインちゃんのほうきは、通常魔力で、時速４０キロあたり、速く飛べるようにエンジンをくっつけてる。

「フォグワーズ推薦のエンジンです」

あんまり長時間ほうきにのってると、股ずれおこすから、最近はみんなつけてるらしい。

ツインテールが水面をうろうろしてる。

さきっちょを片方掴んで、引きずりこんでやった。

「キャーーーーーー!!」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4288ba/

老若男女 魑魅魍魎にボインちゃん 秘境温泉極楽浄土への旅〜ポロリあるよ〜

2012年1月13日13時58分発行